

草飼 稔（くさかい・みのる）

1、プロフィール

詩、短歌、俳句などに固定化されない、ジャンルを越えたところで作品を制作。新聞記者として道義に外れたことへ対峙し続け、言語追求にしても同様の姿勢で制作した。

<生没>

1910(明治 43)年5月 16 日 ～ 1998(平成 10)年7月 10 日

<代表作>

『歌集 喪しみの詩片』『単独登高記』

<青森との関わり>

青森市古川町にて生まれる。青森市立長島小学校卒業。八戸市にて「波止場」「橋」「磁場」の雑誌を編集発行。

2、作家解説

新しい体験と考え方が既成の形式では表現できない場合があり、そのために必然的に形式の破壊や変革の起こるのは当然という考えを根本として作品を制作。初期作品には暗さや絶望感が見られたが、新しい抒情を志向し定着させようという意識は、いつも作品の上に新しいスタイルを生み出してきた。情緒ないし思考を展開するのに特異なスタイルを示してきたが、単なるフォルマリズムではなく、文学的な気質として繊細な情緒があり、主知的な詩的思考が先行していて、抒情のデフォルマシオンを美学として持っていた。新しい意味での抒情詩人であると言えるし、新しいスタイルの中に人間の情緒を主題とし分析し、個人的な審美主義を生かそうとしてきた。

昭和6年から 20 年までの間の活動では、「短歌創造」「椎の木」同人として自由律短歌、詩を書き、「短歌研究」「セルパン」「短歌と方法」「文芸汎論」などにも作品を発表。八戸市から「波止場」「橋」「磁場」編集発行。作品集『喪しみの詩片』、共

同作品集『空間のトルソ』、『詩抄1』を発行。昭和12年から20年まで河北新報社に勤務。20年から停年退職の40年まで信濃毎日新聞社に勤務。この間「新領土」「純粹詩」「荒地」「曆象」「あばあな」などに作品を発表。「くうたふむ」(弘前市)同人。「アルファ芸術陣」会員。44年第一回新短歌人連盟賞受賞。「芸術と自由」同人。共著に『現代短歌大系 10 近代編』『現代文学大系 68 現代歌集』『新短歌作家論』などがある。八戸市の詩誌「朔」(圓子哲雄主宰)に作品、エッセイ、座談を、弘前市の「陸奥新報」にエッセイを掲載した。平成10年7月10日、肺炎のため千葉県で死去。(参考引用文献『青森県詩集・下巻』昭和50年、516～531頁「草飼稔略歴」作者自著、「単独登高者の抒情と理性」中野嘉一、「梢の詩人」金田国武)

3、資料紹介

○『歌集 喪しみの詩片』

図書

1933(昭和8)年5月25日

155mm×117mm

イメージをぎりぎりの時点までつきつめて、梢の先のようなところでとらえようと真髓と完璧さを追求する審美眼と生来の潔癖さから生まれた作品の数々。観念芸術の領域まで踏み込み永遠の無をさぐるところから結晶した詩編、精神のモノクロームの抽象画。